

残念無念集

1 はじめて自分で

はじめて自分で揚げた凧
それが急に廻りはじめた
父は僕の手から糸巻を取ると
右手で二三回大きくひっぱった
凧が ゆっくりと左右にゆれて 落ちついてきた
さあ 大丈夫
僕に糸巻をかへしてくれるのかと思つてみたら
父は なほ 凧をもつと高く掲げようとして糸をひいた
その時 二人の背後から吹き抜けた風が
父の手に糸巻を残して糸を切った
こごえたやうな夕焼雲の上に
はりついた六角形の武者絵
俺から希望を奪ひ
小さくなつて見えなくなつた
父よ あなたは僕の凧を駄目にした

2 川岸は

川岸は荒れてゐる
一本の長い竹は折れて
梢は水につかつてゐる
嵐のすぎたあとの川の水を
飲みつづはてゐる龍の背中
彼は自分が龍であるかのやうに 身を投げ出してゐる
背後にはたくさんの竹がいつせいにゆれてゐる
くちびるを水につけてゐる
流れは彼の下をにぎりながら流れて行く
龍はにごつた流れの中にこそ住んでゐるのであらうに
彼は自分が枯れるのを知つてゐるのか
彼は黒く変色し 竹ではなくなる
龍でなんかあるものか
水は絶え間なく彼の顔をくるみ

自分を折った嵐をおこしたのが自分であるとも思つてゐるのか
身をふるはせ 彼は 龍のやうに
誇り高く 見事なくねり方をしてゐる

3 夕やみの

夕やみの路傍

君の声が僕をふりかへらせた
君は君の側の女に言つた
人ちがひだ 人ちがひだ
僕も 僕に逢つても知らないふりをしてゐた君を
人ちがひだと言はれれば さう思ふより仕方ない
不思議なこともあるものだ
人ちがひ同士が重なるなんて
君の太い指が女の腰の赤いドレスをむんずと押して
もちろん君は僕の方を見もしないで
女の鼻がはつきりと白く高く
僕が僕でなかつたとしたら 君は誰とまちがつたのだらうか
僕に似てゐる男を知つてゐる人 その人は君に似てゐたわけか
如実に感じたことは 僕は自分の類型のはかなさだ
僕は自分に言ひきかせた
人ちがひだ と言ふべきは 僕の方だつたのだ
僕は一人で歩いてゐたのだ
足早に去つた君と女の体格
時間がたつにつれて 僕の気持は荒れてくる
腰の所の指の形が明確になつてくる